

広島俳句倶楽部

令和六年九月作品集

山に遊ぶ

雲雀

二〇代のころ同じ職場にいた人と今も交流が続いています。六十歳を迎えたころからは、健康を考え、近郊の一・二時間で登れる山に行くようになりました。可憐な山野草を見つけて目を輝かせ、頂上からの眺めを堪能し、ハーモニカに合わせ歌をうたいました。そんな楽しい山登りも、コロナ禍と皆の体力の低下で中止になりましたが、今振り返ってみれば、この上もなく楽しい思い出となっています。どこの山のことだったのか、はつきりしませんが、その時々感動や出来事を、この度、俳句に取り上げてみました。

ロープ持ち伝ふ崖道呼子鳥

山下り近づいてくる蛙の声

大空に彩雲を見て夏近し

草茂りこの道ずっと続きをり

励まされ進む一歩に岩鏡

青景する土塁に立ちて風受くる

白南風や挨拶の声返りくる

夏木立続いて歌ふ声響く

帽子取り汗を拭ひて瀬戸望む

下山して靴脱ぐ横に夏薊

《作品鑑賞》

森口良樹

一句一句に山登りの楽しさ、季節の自然とのふれあい、発見を満喫された様子が見て取れます。句中の季語から、様々な山を、季節を、散策登頂された様子も伺われます。きっと、楽しい仲間と充実した時間を過ごされたのだと思います。

ロープ持ち伝ふ崖道呼子鳥

少し険しい山だったのですね。急な崖道もなんのその、郭公の鳴き声を耳にされて、しかし、呼子鳥という季語に驚か、はたまた杜鵑か、様々な声が入り混じって聞こえているかのようにも思われました。自然をきくと堪能されたのだと思いました。

励まされ進む一歩に岩鏡

仲間との山登りのふれあいは、きっと楽しかったのでしょう。お互い励ましあって進む足元の岩鏡は、きっとひと時の安らぎをもたらしたに違いありません。山頂に上りついた友人とのお昼には、チョコレートやお菓子を分け合い、眼下の景色に話が弾んだことでしょう。

白南風や挨拶の声返りくる

山登りの途中にすれ違う見知らぬ人々とのほんの挨拶も、たどり着く山頂までの距離や時間をおそらくお聞きになりながら目指されたのではないのでしょうか。季語の白南風に明るい仲間意識を感じさせ、返りくる声に山への情熱を感じさせます。

下山して靴脱ぐ横に夏薊

山登りを終え、帰宅し登山靴を脱ぐ横に置いた今日の成果は、夏薊だったのですね。鮮やかな夏薊の色彩に、今日の楽しかった思い出が俄かによみがえってきているのではないのでしょうか。楽しく山登りの句を鑑賞させて頂きました。

吉備高原越えて沿うたる夏の川

泳ぎ子の大山道を通り抜け

一面の夏草刈られ国分寺

踏み入れば国分尼寺の砂灼けて

夕立は国分尼寺に似つかはし

初秋の国分尼寺へ道通ず

城垣に沿うて初秋の風を受く

今夜から蟋蟀鳴いて吉備国

古墳から跳んで精霊飛蝗かな

青すすき正面に待つ姫新緑

佐保光俊

葵花の巻き付く蔓を切りにけり

景鶏頭に近づき見上ぐ車椅子

実紫月のあかりに照らされて

川沿を歩く額に秋の風

飛行機雲貫いてをる秋の空

秋風や天守の映る濠めぐり

山間に夕日を受けて稲の波

更ける夜や古米の虫を除きたる

淡き雲流してゐたり今日の月

亡き父の手紙見つくる夜長かな

村上正人

令歎の花しがらきに雨降りつつく

送り梅雨音たててまた降り出しぬ

蟬時雨その真ん中に居る心地

炎天に響くは午前九時の鐘

蟬しくれ日の斑の道をゆきにけり

吾が傍をとんば飛び交ふ宮の跡

東の窓に今宵はつくつくし

朝風は山から吹いて秋初め

万景の道にも咲いて花木權

つくつくし川を見下ろす丘に立ち

高尾ひとみ

バナナ食ふあとの一句を粘りながら

久し振りの家路の坂や法師蟬

朝餉どき窓を過れる秋燕

いわし雲宮島行きの船の水脈

稲妻の真夜の裏山近うして

検診を終へし足取り賜日和

山霧の下りて我が家を隠しけり

月青し月見てるかとメール来る

亡き母と眺めし銀河仰ぎけり

友と吾ぐつと老いたり秋薔薇

あざみ

友宛ての切手涼しき色を選ぶ

歩く人みんな速足夏落葉

車窓より炎昼の街見下ろせり

レッスンへ百日紅の下歩きたる

ヒロシマの復興の劇夏深し

ヒロシマの句を読んでをり晩夏光

手を膝に句を読んでゐる広島忌

玄関に大きなリユック休暇明

空に雲張り付きしまま秋暑し

秋川の端をゆつくり魚の影

亜矢

石場津に立てば平らか秋の湖

梅花藻の青き流れよひえびえと

ひと刷毛で描いてみたし秋の雲

鶴見橋までの散歩や盆の月

笛付きのサンダル楽し月の道

研修を終へし上気や二日月

勝手口開けて虫の音通しけり

梨狩りを終へて諸手の重さかな

吾子ふたり其れ其れ見つめ星月夜

私には勿体無き子星流る

綾乃

夏雲の自在に溢れ四方の空

夏雲の色定まらぬ日暮時

宴果つる路地の明かりや風涼し

寝転びて浜の静けさ夏惜しむ

波音と寒蟬の声午後の浜

朝立てし盆灯籠の白さかな

処暑の浜手より零るる砂熱き

初風や沖ゆく船の音のよき

自転車降りて秋川沿ひを行く

秋蝶の隣へ去りぬ風の中

朝顔や動き始めし町工場

図書館に続刊来たる休暇明

赤蜻蛉次の駅まで歩きをり

赤蜻蛉日没近き川辺かな

各々にふるさとありて秋の空

三四本雲の染まりて秋夕焼

松虫を高きに聞いて谷の道

早朝のゲートボールや竹の春

漁釣や朝一番のバスに乗り

祖父もまた父に教はり漁日和

出勤の朝に見上げて百日紅

裏井戸に母の冷やせる西瓜かな

山間を登つて行きぬ墓参

蜻蛉とり兄の後追ふ幼き子

蜻蛉は吾が指先を見て去れり

眠らんとすれば聞こゆる虫の声

目覚めたる夜半にも聞こえ虫の声

散歩する人の見てゐる萩の花

秋薔薇顔を寄せれば香りけり

杜鵑草まだかと小庭眺めたる

井藤希

栄吉

大畑恵

菩提寺やかなかな鳴いて又鳴いて

手入れ良き古墳の丘や鰯雲

篁の木洩れ日縫うて秋の蝶

秋蝶にまた来たのかと声を掛け

山腹のこも人住み花オクラ

ひとしきり雨降り秋の茄子の紺

裏木戸を潜ればこも虫時雨

長留守の庭にたわわや石榴の実

行く水に揺れの止まざる萩の花

湯上りの縁にしばらく星月夜

暁子

皆出掛け人無きテラスやんま来る

すいっちよの鳴く草叢を見て探す

宿泊の十人の夜具天の川

稲妻の走る夜空をまたも見る

赤とんぼ生家に着けば寄つて来し

湯上りの背戸で幽かにちちろ鳴く

地の蟬に杖の触れれば飛んでゆき

秋風や夫の検診結果待ち

夫入院吾子と二人の秋の宵

残る蚊にいつの間にも刺されをり

すみれ

チャイム押す前に朝顔眺めたり

街路樹を今昇りくる盆の月

行きどころ無き蔓伸びて秋の庭

どこからか雨の匂や萩の花

萩の花抜け来る風を受けにけり

十人が窓に並びて月を待つ

ビルの間に稜線近し秋の山

手の平に馴染んでゐたり花梨の実

会釈して秋草の道すれ違ふ

抱き上げし赤子の顔に秋夕焼

知佳子

赤子のそば母はぐつすり昼寝せり

夏座蒲団赤子手足を動かして

兜虫孫から二日預かりぬ

盆の客母の施設も訪ねくれ

初盆の義母の折り紙並べたり

幼子と回り灯笼眺めをり

山墓に盆灯笼が並ぶなり

母が家に上る坂道赤とんぼ

野分くる赤子すやすや眠りをり

雨降つて虫の声なほ幽かなり

ちどり

死魚つく夏の鷗や汽水川

吾の指掠めて飛びぬ蟬の空

立秋の川面を流れ岳一つ

自転車に盆灯笼載せ男行く

処暑の朝黄金山に雲懸かる

秋めくや空に震える星一つ

月見酒夫には赤ワイン注いで

ハモニカを吹く男居て秋の海

ポツキーをポキポキ秋の句を作る

歳時記の破れ繕ふ夜半の秋

辻純江

夫に云ふやと蕃茄の熟れしこと

今朝もまた凌霄の花掃いてをり

エプロンに溢るる胡瓜友の呉れ

笑顔して夏帽の人早逝きぬ

夏の川電車の音に鳥飛んで

町内の草取を終へ話し込む

虫籠を直してをりぬ父ひとり

草叢に負飛蝗を見つけたり

雨戸閉め台風に耳澄ましをり

電車バス止め台風の町静か

雲雀

秋茄子溢れる籠を留守宅に

秋の灯や先にお風呂に入ります

鏡面の湖蜻蛉産卵す

空広く蜻蛉集まる湖畔かな

草原の牡鹿重げに顔を上げ

音もなく啄木鳥上下する林

毒茸の怖い話を聞きながら

丹頂は翼広げて物語る

丹頂の首上がるとき息止めて

手作りのジャム瓶並ぶ秋の宿

片かげり狭きに吾が身寄するなり

眠れない眠れないもう朝の蟬

汗まみれ涙まみれや乳足りぬ

向うから驟雨来てゐる晴天かな

あの場所へ次の雷鳴るまでに

芙美子の生家訪うて畑の坂

白桃を匙でつぶして稚の口

処暑の朝生家を訪へる子の家族

ころもなし大きく見ゆる今日の月

櫻を置けみんな銀河の中に居る

親も子も踝浸かり水遊

寝ねし子の添ひ寝に扇く水団扇

古里の青き遠嶺や月見草

日の盛檀家を巡る僧侶かな

柿の花同窓会に知る計報

夜の街浴衣の友と肩並べ

墓仕舞の読経の終はる晩夏かな

下流へと驟雨の音の移りけり

秋立つやふらりと入る純喫茶

虫鳴いてまたひと際の静寂かな

ふじ女

松田裕子

森口良樹

秋暑し木洩れ日の下バスを待ち

座布団をあるだけ干して盆用意

水切りに遊び呆けて秋夕焼

海に向く電線に群れ秋燕

浅漬けの置かれてゐたる秋の卓

本堂に法話の進む鈴虫寺

休耕田覆ひ尽せる薄かな

朝露をつぎつぎ蹴つて登校児

野仏に咲き揃ひたり曼殊沙華

山野ウタ

不思議なり色とりどりの紫陽花は

片蔭でひと休みしてベビーカー

女の子そつと近づき蟬を捕る

両肩に伸し掛かりくる油照

隣からオカリナの音夏の夜

こぼれ種の朝顔二つ咲きにけり

須美れい

蛸や一人気ままにウォーキング

一面にくの字くの字の螢草

見上ぐればビルの隙間に細き月

断雲に隠れ現れ月白し

鯉の潮雁木に寄する小さき波

大原良子

ひまはりの我が背丈より伸びてをり

椀ぎ立ての胡瓜切らずに丸齧り

大皿に真つ赤なトマト並べたり

満月に芒と団子供へけり

芒備線の窓から見ゆる秋の色

河原静子

袖の花の風を厨に入れにけり

清掃を終へし公園蜻蛉群る

腕章を付けて警備や虫の夜

鈴虫を連れて乗りたる新幹線

帰り来る子を迎ふれば望の月

高嶋絹代

麦の秋やはらかきかな恩師の手

級友の声は変はらず桐の花

還暦の友と歩いて土用東風

母の背のそろりそろりと桃を剥く

ライオンの深き眠りや秋の風

土肥律子

昼寝せる祖母を残して鬼ごっこ

カラフルに並ぶ風鈴写真撮る

刺繍して疲れし目光守宮這ふ

西瓜見て電話してみる祖父の家

星数へ川風を受け花火待つ

金

二番花さらに緋の濃きカンナかな

勝手口開けて止みたる虫の声

照らされて月の夜道を帰りけり

満潮の川面を照らし今日の月

秋の日の店の奥まで入りくる

撫子

今宵はと幾度も月を見上げたり

月光に安芸の小富士の浮いて見ゆ

夜の更けてベランダ越しに月明り

窓拭きの見上ぐる空に昼の月

帰り道足元照らす秋の月

美耶

マスカット吾に褒美と籠に入る

粒同士ぎゅつと押し合ふマスカット

マスカット大きな実から掬いで食ぶ

月見上げ凭るる壁に温みあり

満月の締めに出さるる団子汁

山崎桂子

指汚し夫と煮花果食べてをり

芒の穂映して水の澄みるたり

一面の敗荷に風吹きつゝのる

破れゆく芭蕉に雲の流れ来る

桑門わかこ

手箒に座敷掃きをり風涼し

真ん中をぐやんけんする子大西瓜

雲梯に海見つめる子晩夏光

台風過一張羅着てお出かけす

高梨英子

系瓜の鈴生りとなり揺れてをり

踏ん張つて野分の風を受けにけり

台風一過虫たちの鳴き始む

十六夜の薄雲とはし輝けり

民

終戦日内地外地は死語となり

踊子の母の仕草に似てきたり

階段の狭き画廊の美術展

やや硬いかばちや面取りしてをりぬ

みさ子

歳時記を持つて旅する初秋かな

迷ひ猫戻りし菊の節句かな

同僚と並び見上ぐる今日の月

上島康子

虫すだく庭にもの干す夕べかな

空家には芒ばかりが揺れてをり

死といふはすぐそこにあり秋桜

紀英子

里山の松の見えたる月今宵

十六夜の瀬戸を横切る船ひとつ

熊谷ゆり子

野分来る干し竿二本降ろしたり

煮花果に語る思ひ出はるかなり

やす保

令和六年八月度作品集より

大畑恵 私の選んだ十句

最奥の村に開いて未草
坂道の蟬骸掃き長崎忌
きちこうの花に見らるる心地せり
吾子眠る小児病棟星涼し
万緑の山道妻と登りきる
風の止む風土記の丘に蟬しぐれ
胸元に向きを変へたる赤蜻蛉
母が家に行く度探す茗荷の子
境内に漏るる雅楽や杜涼し
音で知り布団の中で聞く花火

佐保光俊
村上正人
高尾ひとみ
綾乃
井藤希
暁子
知佳子
ちどり
森口良樹
なつ

辻純江 私の選んだ十句

遠花火あすは大山道歩く
背に地球感じ寝転ぶ星月夜
この駅を発つまで鳴いて時鳥
谷風に高く乗りたる黒揚羽
団子虫道路を進む真夏かな
トンネルを出れば故郷蟬しぐれ
等分に母の切りたる西瓜かな
風紋の崩るる砂丘夏の果
黒猫のぬつと振り向く木下闇
パンザイで眠る赤子や夏座敷

佐保光俊
村上正人
高尾ひとみ
あざみ
亜矢
綾乃
大畑恵
松田裕子
森口良樹
高梨英子